

WG活動紹介 (II)

医学用原子分子・原子核データグループの活動について

京都大学原子炉実験所

古林 徹

kobato@rri.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

本ワーキンググループ (WG) は、1982年に設置され、既に18年の歴史があります。本年度から前任者の平岡武氏の後を受け継いで4代目のグループリーダーを務めさせていただくことになりましたが、歴代のグループリーダーや委員の方々の実績やその働きを考えますと、自分が引き継ぐことに正直言って躊躇しました。とはいえ引き継いだ限りは、微力ではありますが自分のベストを尽くすということを基準に、失敗を恐れず取り組む覚悟であります。ご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。

2. 本WGの役割等について

医学用のデータは、診断や治療等の装置に関係するものに加えて、人との関係に着目したものが重要であります。このような考え方から、1994年に日本医学放射線物理学会で出版された「医学物理データブック」は、放射線だけではなく多くの物理工学データが集められています。従って、本WGの役割は従来から言われているように、データの生産や加工に重点を置くのではなく、医学にとってどのようなデータが重要か、緊急性があるか等のユーザーの情報を、データの生産・加工グループに提供することと言えます。ただし、人が装置などに比べると低いエネルギーで相互作用する対象であることから、低エネルギーのデータについては、その重要性を認識していることもあり、データの生産・加工に直接関わることも必要になることもあるように思います。

3. 活動の方針や進め方について

WGの委員は個人として参加する形態であることから、以下の方針や進め方についてもどの程度のレベルで行うかが問題となりますが、目指す方向を示すものという意味合いで掲げておくものとします。

- (1) 短期、長期の本WGの目標を設定する。(本WGの守備範囲の設定)
- (2) 委員各人の本WG内の役割分担を緩やかに設定する。(協力体制の明確化)
- (3) シグマ研究会での発表や核データニュースへの投稿等を行う。(定期的な情報発信)

- (4) 年間数回程度の会合を補うために電子メールなどを活用する。(効率的な運用)
- (5) データに関する医師のニーズの掘り起こしを行う。(医学との関係強化)
- (6) 医師との接点にいる人等との交流促進をする。(交流促進)

4. おわりに

本ワーキンググループ発足も出版に大きく貢献した、「医学物理データブック」も出版後6年を経過しました。この本をできるだけ多くの方に知っていただくことに加えて、この本を更に使いやすいものとし、インターネット対応など時代に即した機能や内容を加えるような検討もこのWGの役割の一つになるかと考えています。このような活動を通じて、時代の要請とその変化に対応することから、新たな課題を発見しデータ整備を進めて行ければと考えています。

平成12年度の委員：

伊藤彬(癌研究会)、岩波茂(北里大)、上原周三(九大)、岡本浩一(日大)、
尾川浩一(法政大)、古林徹(京大炉)、高田信久(電総研)、中井洋太(鈴鹿
医療科学大)、原田康雄(昭和大)、松藤成弘(放医研)、山口恭弘(原研)

